

令和7年度学校評価アンケートの結果と改善策

山形県立楯岡特別支援学校寒河江校

学校教育目標「『げんき』に生活し『チャレンジ』と『かかわり』を楽しむ人を育てる」

1 令和7年度 学校評価保護者アンケートの実施について

(1) 保護者アンケート「学校生活アンケート」

- ① 実施期間 令和7年12月19日(金)～令和8年1月9日(金)
- ② アンケートの集計方法について
保護者の皆様に記入していただいたアンケート用紙を教頭が直接開封し、集計を行った。
- ③ アンケート項目について
学校教育目標及び経営の方針・重点を踏まえた項目に変更した(12項目)。

(2) 教員アンケート

- ① 実施期間 令和7年12月19日(金)～12月26日(金)
- ② アンケートの集計方法について
アンケート用紙を教頭が直接開封し、集計を行った。
- ③ アンケート項目について
学校教育目標及び経営の方針・重点を踏まえた項目に変更した(14項目)。

2 学校評価アンケートの結果と考察 ※集計結果参照

(1) 学校関係者評価(保護者アンケート)

(4:そう思う 3:だいたいそう思う 2:あまり思わない 1:まったく思わない)の4段階で評価

- ① 回収率は100%(21/21 家庭数)であった。
- ② 全体の平均値は3.77であった。
- ③ 12項目中平均値が3.5以上の項目は12項目であった。

<平均値が3.5以上の項目>

番号	設問内容	評価
1	子どもは、学校へ行くことを楽しみにしている。	3.76
2	先生方は、明るく協力して授業に取り組んでいる。	3.90
3	子どもの健康を守る取組みが行われている。	3.76
4	施設・設備の安全が保たれている。	3.52
5	先生方は、子どもを理解し、実態に合った指導・支援を工夫している。	3.90
6	学校行事、教科学習、校外学習等、子どもに必要な学習が計画的に実施されている。	3.81
7	学習でICT機器が効果的に活用されている。	3.57
8	子どもは、学校生活や学習活動を通して成長している。	4.00
9	各種お便り、ホームページ等により、学校の情報が発信されている。	3.81
10	授業参観や個別面談等、学校生活の様子を知る機会が確保されている。	3.90
11	他校の児童生徒との交流学习が、計画的に実施されている。	3.67
12	地域の方々と交流する学習や地域人材を活用した学習が、計画的に実施されている。	3.67

- ④ 保護者アンケートでは、全項目について比較的高い評価を得ている。特に8番の項目については、全保護者が「そう思う」と回答している。この結果は、フリー授業参観、各種行事での見学会、個別面談、PTA親子行事、日々の連絡帳、学級だよりを通して、児童の日々の学習の様子を丁寧に伝えてきた結果だと思われる。

特に、今年度から新たにゲストティーチャーや高松小学校の児童との交流学习時に自由参観を行ったことで、日常の学習時とは異なる児童の様子を伝えることができた。また、個別面談では映像を用いて学習時の様子を伝えるスタイルを多くの学級で取り入れたことで、具体的に児童の成長を知ってもらうことにつながったと思う。

その一方で、他の項目よりも、施設・設備の安全面、学習におけるICT機器の活用、他校の児童生徒との交流学习、地域交流や人材活用に関する項目の評価が低くなっている。これらの項目については改善が必要である。

(2) 学校自己評価(教員アンケート)

(4:そう思う 3:だいたいそう思う 2:あまり思わない 1:まったく思わない)の4段階で評価

- ① 回収率は100%(12/12 教職員数)であった。
- ② 全体の平均値は3.55であった。
- ③ 14項目中平均値が3.5以上の項目は11項目であった。

<平均値が3.5以上の項目>

番号	設問内容	評価
1	子どもは、学校に来ることを楽しみにしている。	3.75
2	明るく子どもに接し、教師間で協力して授業に取り組んでいる。	3.50
3	子どもの健康を守る取組みに努めている。	3.83
4	施設・設備の安全点検や整備等に努めている。	3.75
5	一人ひとりの子どもを理解し、実態に合った指導・支援を工夫している。	3.58
6	学校行事、教科学習、校外学習等、子どもに必要な学習を計画的に実施している。	3.50
8	子どもは、学校生活や学習活動を通して成長している。	3.75
9	各種お便り、ホームページ等により、学校の情報を発信している。	3.50
10	授業参観や個別面談等、学校生活の様子を知る機会が確保されている。	3.50
12	地域の方々と交流する学習や地域人材を活用した学習が、計画的に実施されている。	3.50
13	生徒指導力、学習指導力、特別支援教育力等を高める研修に努めている。	3.75

<平均値が3.5以下の項目>

番号	設問内容	評価
7	学習でICT機器を効果的に活用することに努めている。	3.42
11	他校の児童生徒との交流学习を計画的に実施している。	3.25
14	時間外勤務時間が、月30時間を超えないで仕事ができるように工夫している。	3.08

- ④ 教員アンケートでは、児童の健康保持の取組み、施設・設備の安全への対応、児童の学びの見取り、自己研修の項目について特に評価が高かった。これは、児童の日々の健康の維持・管理、安心安全な学習環境の整備は、児童の学びを支える最も基本的なことであり、単に教えるだけではなく、学びの土台となる点にも全教職員が注視し、日々の学習を行っていることの結果だと言える。

児童の学びの見取り、自己研修については、今年度、学校研究のテーマを児童の実態把握に設定し、それに付随した各種研修会を校内で定期的に行ったことが結果に結びついていると考えられる。特に児童の実態把握については、自立活動の内容を取り入れ、個人ではなくグループで一人の児童の実態を見合う場面を設けたことで、経験の浅い教員が経験のある教員のOJTによる支援を受けられる機会が増え、これまで気付けなかった見

童の姿に気付くことができるようになったのではないだろうか。

一方で、ICT機器の効果的な活用、他校との交流学習、業務の進め方といった項目については、評価が低くなっている。これらの項目については改善が必要である。

3 改善策

(1) 学校関係者評価(保護者アンケート)

今回、全項目が平均3.5以上であることから、なかでも3.5に平均値に近い4番と7番の項目に対して改善策を考察していく。

① 施設・設備の安全が保たれている。(3.52)

毎日児童下校後、担任による教室等の安全点検のほかに、月初めに全教職員で学校施設全体の安全点検を行い、児童が安全に学習を行うことができるように取り組んでいる。実際に学校の施設が原因で事故等が生じた事例は今年度一件もない。一方、保護者からは施設の狭さ、クールダウンの場を確保して欲しい等、物理的な面での指摘を受けている。こうした指摘に対して、高松小学校に依頼して音楽室の借用、児童が興奮した際、ラーニングセンター内に個室 TENT を設置しクールダウンの場にさせていただく対応をとっている。こうした対応を今後も継続して取り組み、保護者にも丁寧に伝えていく。

② 学習でICT機器が効果的に活用されている。(3.57)

タブレットを使用した学習の紹介を十分してこなかったことが結果につながっていると思われる。実際、日常的にタブレットを使用し、映像や筆記などのアプリを使った学習を行っている。特にダンスや音楽の学習では、インターネットを通して視覚教材をこれまでよりも気軽に準備し活用できることで、児童にとって分かりやすく興味関心を引き付ける習ができていく。こうした取り組みを、今後はフリー授業参観や学級だよりなどで、丁寧に発信し伝えていく。一方、保護者からは兄弟児の学校では、自宅へのタブレットの持ち帰りがあることから、なぜ特別支援学校では無いのかと問われることがある。現時点で、機器の管理、アプリの使用に関して難しい点があることから持ち帰りをしていない旨を丁寧に伝えていく。

(2) 学校自己評価(教員アンケート)

① 学習でICT機器を効果的に活用することに努めている。(3.42)

ICT機器の活用については、実際に日々の学習で使用しながらも、これ以上、どのようなことができるのか、学習への取り組み方法について行き詰まり感を多くの教員がもっていると感じる。例えば、通常小学校で用いているデジタル教科書や電子黒板による視覚的、体感的な学習について、同様の学習機材を用いて学習をすれば、さらに児童の学びが深まっていくという可能性を感じながらも、実際には器具や技術的ノウハウが不足していることで実現することは難しい。今ある物だけを使って、その枠の中で、さらに効果的な活用をどのようにしていけばよいのか、全教員が模索している状況が現在である。特別なことをするのではなく、今ある物を使った日常的な仕様方法の事例を出し合い見合うことで、全教員が、ICT機器の様々な使用に気付くことができるようにしていく。

② 他校の児童生徒との交流学習を計画的に実施している。(3.25)

他校との交流については、併置校である高松小学校とは学年交流や行事交流、休み時間の交流など、日常的な交流を行っている。ただし、学年交流については、学年によって差が生じており、数回実施している学年とそうでない学年がある。特に高学年になればその傾向は顕著である。低学年時は一緒に遊ぶだけでも交流だったが、高学年では、そうした時間を作ることも難しい。この点を踏まえて、高松小学校側とも話し合い、どのような交流を持つことができるのか検討していく。一方、寒河江校は、高松小学校以外の学校との交流は皆無である。今年度は、寒河江工業高等学校の生徒とものづくり教室を行った。高校生への支援のもと、センサリーボトルを作り上げることができた。このことも踏まえ、小学校に限らず、中学校、高等学校との交流も視野に入れて今後検討していく。

③ 時間外勤務時間が、月30時間を超えないで仕事ができるように工夫している。(3.08)

業務の改善及び見直しについては、日常的に全教員で考え取り組んでいる。実際、会議資料の事前配布や内容の精選により、一つの会議は1時間以内で終わるようになり成果は出てきている。また、時間外業務時間が30時間を超えている者は一部でほとんどの者が20時間台である。ただし、時間には表れないが、授業の準備、校務分掌における業務のうち、学校では後者を優先し、授業の準備は家庭に持ち帰り行っている教員が多いのも事実である。その点も踏まえて、勤務時間内で授業準備等が行える時間を今よりも増やしていく必要がある。そのために、人的な業務の分散(個人に特定の業務が集中することを改善する取り組み)と時間的な分散(個別の指導計画作成時によく見られる、特定の時期に多発する時間外労働の業務を減らすため、作成期間の延長)を一層実施していく。

4 まとめ

(1)【げんき】について

児童は毎日元気に登校し、欠席も少ない。教員は、毎朝駐車場まで、児童の出迎えに行っている。駐車場から校舎までのわずかな距離だが、そのわずかな距離であっても、手をつなぎ一列になり、周囲の車の動きに注意し安全に登校できるように全員体制で取り組んでいる。そして何よりも、朝一番、児童に対して笑顔で元気に「おはようございます」と挨拶することを共通の約束にしている。当然保護者にも行っている。

寒河江校は、上学年グループ、下学年グループによる学習をする機会が多い。また、自立活動や国語、算数の学習では、課題別のグループ学習を行っており、担任以外の教員が児童にかかわることが多い。結果、担任だけでは気付かなかった児童の身体的、心理的な変化に、複数の教員の目が注がれ早期の発見が可能になっている。早期の発見からの、家庭、福祉機関等を交えた早期の対応につながり、児童のケアをチームで対応している。このチーム体制は今後も継続していきたい。

なお、児童の安全確保には、日頃からの高松小学校との連携は重要であり、避難訓練をはじめとした危機管理体制の構築を両校で話し合い、今後も継続して取り組んでいく。

(2)【チャレンジ】について

今年度は、児童の表現力を伸ばすことをねらいとして、ゲストティーチャーによる学習の機会を多数設定した。ダンスの学習では、年7回、山形市の心体表現の会の講師2名が来校して学習を行った。型にはまらない自由な自己の表現によるダンスを、高松小学校の児童と共に行い、一人一人が新たな発見を感じる事ができた。創作活動として天童市のアトリエこねるが2回の学習を行ってくれた。特別支援学校卒業のてっちゃん(長濱哲哉氏)も講師の一人として来校し、児童に創作する面白さを教えてくれた。普段とは異なる大人が先生として児童に接する学習は、児童にとってとても良い経験になった。

校外の絵画コンクールやかかし祭りなどの大会にも積極的に参加し、児童が活躍できる場を広げることができた。絵画コンクールでは、全学年から受賞者が出て、西村山地区の他校の小学生と共に賞状を授与される経験を持つことができた。

(3)【かかわり】について

児童同士のかかわりを、学校としてとても大切にしている。友達と一緒に移動する、友達を呼びにいくなど、児童が誰かを意識して行動できるように、全教員が取り組んでいる。以前は見ることができなかった、子ども同士のケンカを最近見ることができるようになった。ケンカ自体は褒められた行為ではないが、これまで相手を意識することが乏しく、どちらかと言えば教員とのかかわりが主だった児童達が、お互いの存在を認め合い、自分の思いを通そうとしてケンカになることは、人としての成長だと感じている。児童同士がお互いの存在を知り、児童同士と一緒に活動することで、学校という枠の中で社会性を育てていくことができていると感じている。

5 次年度に向けて

今年度の保護者・教員アンケートのいずれでも評価が高かった項目として、「子どもの健康を守る取組みに努めている」がある。様々な障がいをもっている児童達であり、自分から不調を訴えることが難しい児童達でもある。そうした児童に日々接しながら、教員は、ほんの小さな変化も見逃さず、保護者、放課後等デイサービスへの連絡と情報の共有を徹底してきた。結果、周囲でインフルエンザの感染症が流行した際も、学校が起点となって感染を広げることは一度もなかった。この姿勢は、今後も継続して持ち続けていきたい。

また、「子どもは学校生活や学習活動を通して成長している」も、両者で高い評価をつけている。これは、学校からの児童の様子発信の際、「できた」だけではなく、「どのような学習でどのようなことをしたときに、できた」としっかり丁寧に保護者に発信するということを全教員が徹底して行った結果だと言える。このことは、学期末にまとめる個別の指導計画、児童の学習の様子の教員の記述にもしっかり反映されている。

両者の共通する点は、児童を個人で見るのではなく、チームで見ることで、お互いの気づきを共有できた結果である。児童の学びのためにも、この学年の枠を超え、全教員がチームとなって全児童を見る指導支援体制は、今後も継続していきたい。